

<b>海外アカデミック・ディスカッション</b>	
<b>第4回国際ユーラシア音楽祭に参加して</b>	
山下 正美	比較社会文化学専攻
<b>期間</b>	2009年9月14日～2009年9月22日
<b>場所</b>	ロシア連邦ブリヤート共和国ウラン・ウデ市
<b>施設</b>	ロシア連邦ブリヤート共和国東シベリア芸術文化研究所

**【内容報告】**

アカデミック・ディスカッション実習先のロシア連邦ブリヤート共和国東シベリア芸術文化研究所では、2009年9月15日～20日第4回国際伝統音楽フェスティバル「ユーラシアの響き Sound of EurAsia」が行われた。主催は、国立東シベリア芸術文化研究所のほか、ロシア連邦文化省、ブリヤート共和国文化省ほか、全12機関である。

このフェスティバルは、2006年に東シベリア芸術文化研究所のヴィクトル・ヴァシリエヴィチ・キトフ教授によって始められ、毎年開催されている。これまでにロシア連邦内からハカス、トゥバ、ウドムルトのほか、モスクワ、ノボシビルスク、サラトフ地域から、他国ではインド、中国、韓国、ブルガリアなどから参加があった。‘EurAsia’ という表記の仕方からも分かるように、参加国は、ヨーロッパ諸国・アジア諸国であり、日本からの参加は今回が初めてであった。

今年はベラルूस、ギリシア、中国（台湾）、日本、モンゴル、ギリシア、ラトビア、ロシア（モスクワ、ウランウデ他）から伝統楽器の演奏家・音楽学者らが招待され、5日間に渡って演奏会や学術発表、各楽器のマスタークラスが行われた。日本からは、大阪大学名誉教授の山口修先生、箏・三味線の菊武厚詞氏、三味線・箏の菊重精峰氏、尺八の川崎敦久氏が招待され、これに同行するかたちで政策研究大学院の角美弥子氏、筆者も参加した。筆者は、聴講生としてフェスティバルに参加し、用意された演奏会・学術会議・マスタークラスを受講することで、修了書（ディプロマ）を取得した。

**【アカデミック・ディスカッションの成果】**

今回のフェスティバルの目的としては、アジアとヨーロッパ諸国の演奏家、教育者、熟練者、作曲家による創造的な意見交換の場の確立、日本やモンゴルの伝統楽器演奏家の研究およびその実践法の利用、独奏民族楽器ジャンルの発展プロセスの研究などが

掲げられていた。こうした目的に基づいて組まれたプログラムは、同系統の楽器を集めた興味深いもので、北方諸民族の音楽文化（特にサハ）を研究する筆者にとって、大変有益なものであった。

まず、今回のフェスティバルを通して、ブリヤートの音楽文化や、周辺諸民族の楽器に日本と同系統のものが含まれることがわかった。例えば、日本の三味線とは、モンゴルのシュダルガ（3弦）、ブリヤートのチャンザ（4弦、蛇皮）、中国・台湾のサンシェン（3弦、蛇皮）が同系統の楽器である。箏では、モンゴルのヤトガ、ブリヤートのヤタガ（写真1参照）、中国・台湾のグージョンなどが同系統である。ラトビアのコクレ、ベラルースのツィムバル、中国の楊琴も、演奏法は異なるが同じツィター属の楽器である。さらに、これらにトゥバの箏チャダガンや、ハカスの箏チャトハンをも含めることができる。

フェスティバル中に入手した資料から、これらの同系統の楽器は、モンゴル帝国時代に中国から持ち込まれ、モンゴル経由でブリヤート、トゥバなどに広まったものであることがわかった。筆者の研究しているサハは昔、ウラン・ウデ市から程近いバイカル湖周辺に住んでいたとされており、今回入手した資料をもとに比較研究を行いたいと考えている。

最後に、研究所で作曲を教えているサンジェヴァ・ラリーサ教授との対話から、日本音楽の発信に関する強い要望があったことを書き添えておく。サンジェヴァ教授は、研究所でも日本音楽の授業を開講したいが、日本は閉じられていて日本音楽に関する情報を得ることが難しい。もっと情報が欲しい。また日本でそうした会議やマスタークラスなどがあれば参加したい、と話していた。特に彼女は作曲が専門なので、日本の伝統楽器とオーケストラの作品に興味があるということだった。

「もっと情報が欲しい」という状況は、日本にとっても同じである。ブリヤートをはじめ、シベリア地域に住む北方諸民族の音楽文化は、外国人にほとんど知られていない。知られなければ研究対象とし

て取り上げられる可能性も低く、この地域の音楽研究が立ち遅れることになる。そうした地域で、日本の音楽文化について発信すると共に、現地で得た情報を国内外で広く発表し、相互理解を深め、今後の研究交流や文化交流へと結びつけていきたい。今後、

国際伝統音楽学会 International Council of Traditional Music、東洋音楽学会、日本音楽学会での学会発表・投稿論文、ユーラシア研究所発行の『ユーラシア研究』等へ、成果を発表する。



【写真1】左からモンゴルのヤトガ、ブリヤートのヤタガ



【写真2】ブリヤートの楽器奏者と、尺八の川崎敦久氏。  
左からブリヤートの箏ヤタガ、（尺八）、フル、チャンザ



【写真3】  
楽器を持ちかえ親睦を深める演奏家。

左から、モンゴルのフルをもつ  
ブリヤートの演奏家、  
ブリヤートのチャンザをもつ  
三味線の菊重精峰氏、  
日本の三味線をもつ  
モンゴルの演奏家

**【指導教員のコメント】**

山下正美さんは本学の学部卒業論文以来、アジアの口琴についての研究を重ねており、修士論文ではロシア連邦サハ共和国でのフィールドワークをもとにして、ユーラシア大陸の口琴文化の一端を明らかにした。博士後期に進学後は、ロシア語とサハ語を活用して、ヤクート大学での研修など、サハの人びとの口琴文化がいかに日常生活に密着しているのかを、アマチュアの音楽活動の考察にも対象を広げることによって、さらに研究している。また、南アフリカで開催された国際伝統音楽学会（ICTM）では、アジアの口琴文化について、サハと日本を事例にした発表を行なうことで、海外のサハ音楽の研究者と交流をするだけでなく、アジアの口琴文化を海外に紹介することにも大きく貢献している。

今回のプログラムでは、ブリヤート共和国東シベリア芸術文化研究所で開催された、第4回国際伝統音楽フェスティバルに、日本の伝統音楽の演奏家、音楽学者と共に、山下さんも、音楽学研究者として同行、参加した。日本からの参加が初めてであったため、ロシア語のできる山下さんは日本とロシア連邦諸国との交流の架け橋として、重要な役割を演じた。とくに日本を代表する民族音楽学者である山口修大阪大学名誉教授と各国の研究者との間をつなぎ、山下さん自身もその関係で多くのアジア音楽研究者とディスカッションができたことは、大変大きな成果である。

さらに、このフェスティバルの目的がアジアとヨーロッパとの間で、音楽の実践と研究の両面での交流をはかるものであることから、サハの音楽を研究している山下さんにとって、ユーラシアというコンテキストのなかで、日本も含めたアジアの音楽、そして研究対象のサハの音楽を、演奏家たちの具体的な音楽実践を通じて、位置づけることができたことは、大変貴重であったと言える。そのことは、今後のアジア音楽研究における新たな視点を得るだけでなく、山下さんの研究を実際の音楽文化に基づいたしっかりと地に足の着いた研究として生かすために十分に価値があり、かつ研究者としての責任をも含めた、より大きな文化交流の基礎となるものである、と言えよう。

以上から、今回のアカデミック・ディスカッションのプログラムは派遣学生の山下正美さんの今後の研究にとって、大きな意味を持つだけでなく、日本およびアジアの音楽学研究にとっても、その成果を示すに十分に値するものであったと考えられる。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 永原 恵三)